中西哲生さんら、熱く語る

社会体育研究所スポーツレガシーシリーズ第3弾

W杯サッカー南ア大会は日本に何を遺したか

▲　サッカー界の将来について熱論する右から宇都宮さん、後藤さん、中西さん（左はコーディネーターの内山ＮＨＫチーフアナウンサー）

サッカーW杯をテーマに社会体育研究所（佐藤雅幸研究所長）のシンポジウムが10月20日、生田キャンパスで開かれた。元専大スポーツ編集部の馬場雄也さんから感想が寄せられた。

（シンポジウム詳細は同研究所ホームページに掲載）

スポーツの影響力、改めて感じたシンポ

馬場　雄也（ネット情報４）

夕暮れ時にもかかわらず、生田キャンパスで最大のキャパシティーを誇る10301教室が、500人余りの若者であふれかえった。なかば束縛されて受ける授業以外で学生たちがこんなにも集まることは、学生である自分の立場から言っても驚嘆に値する。それだけ、サッカー、いやスポーツには人をひきつける力があるのだろう。

「スポーツレガシーシリーズ」と銘打って行われるこのシンポジウムは、社会体育研究所が、「我々を育ててくれたスポーツの本当の価値を再認識するとともに、近未来を担う学生がそれについて考える機会を設けたい」という趣旨で、毎回テーマに沿った特別講師を招いて、2時間余りのトークを繰り広げる。一昨年の「オリンピックがもたらすレガシー」、昨年の「スポーツの価値とは何か」に続いての第3弾となる今回のテーマは「ワールドカップサッカー南アフリカ大会は日本に何を遺したか」。元Ｊリーガーでスポーツジャーナリストの中西哲生さん、サッカージャーナリストの後藤健生さん、写真家兼ノンフィクションライターの宇都宮徹壱さん、そして司会進行役のＮＨＫチーフアナウンサー内山俊哉さんの4人により、ワールドカップでの戦いぶり、そして日本サッカー界の将来について熱論が展開された。

▲　あいさつする室井義雄副学長

この主題に至った最大の理由は、つい先日終わったばかりの旬な話題だからだろう。しかしながらそれだけではないことに、当日私は気がつくこととなった。長くアパルトヘイト政策がとられていた南アフリカの地に多種多様の民族を集わせ、不況にあえぐ全世界に莫大な経済効果と生きる喜びをもたらし、我が国には他者に能力で劣っても戦い方次第で勝ち抜いていけると希望を抱かせたという、あの大会の隠れた顔。想像していただきたい。これらを実現しようと、いったいどれだけの試みがなされてきただろう。まくさに競技人口2億4千万人以上と言われる、国際的に最も有名な競技だからこそ実現できたことなのだ。サッカーが、いやすべてのスポーツが秘めているだろうとてつもない影響力を、この日私は思い知らされたのだった。

◀　飯田義明経済学部教授がスポーツ社会学の視点から大会の意義を解説

専大体育会に目を向けよう

同時にもどかしさを感じた。こんなにも強大な力を、専大は存分に生かせていると思えないのだ。これは私の専大スポーツ編集部在籍時代の経験から感じることだが、我が大学の学生は他大学に比べて体育会への興味が低い。全般的に高い競技レベルにあるにもかかわらずである。

今回、スポーツに好意を抱いている人が学内に多数いる事実が確認できた。ぜひ一歩進んで我が大学の体育会についても知っていただきたい。そして、どんな形でもいいので応援していただきたい。それが選手たちを強くし、ひいては専大を今以上に繁栄させる近道だと私は思うのだ。

ブラインドテニス普及に尽力

◀　シンポジウムであいさつする佐藤教授

スポーツ心理学の研究者でもある佐藤雅幸経済学部教授は、体育会女子テニス部監督として全国トップレベルのチームに育てあげてきた（16面に関連記事）ほか、日本生まれのブラインドテニスの普及にも力を注いでいる。

視覚障がい者向けの他の競技（テーブルテニスやフロアバレー）は、ボールが地面や床を転がる二次元の球技であるのに対して、ブラインドテニスは空中に浮くボール（音の出るボール）を打つ三次元的なスポーツ。日本の競技人口は300人ほどだが、イギリス、韓国などにも広がりをみせている。10月24日に行われた日本大会の模様は初めてインターネットで生中継され、世界中から注目を集めた。

ブラインドテニスのゲームの分析を行い、関連書籍も出版している佐藤教授は、「その可能性は、専修大学社会体育研究所のキャッチフレーズでもある〝Sports for all〟であり、障がいの有無にかかわらず、全ての人が楽しめるユニバーサルなスポーツとして、将来的にはパラリンピックを目指して活動していきたい」と話している。

ネットワーク情報学部コンテンツデザインプログラム

登戸小学校5年生「理科」体験型学習教材を開発

多摩区・3大学連携事業

多摩区からの委託を受け、ネットワーク情報学部コンテンツデザインプログラムの2年次生が、登戸小学校5年生の理科「水のはたらき」の学習に関連した体験型学習教材を開発している。委託事業名は「多摩川周辺地域住民のための体験型河川学習コンテンツの開発」。10月4日には、同小学校の児童が生田キャンパスを訪れ、大学生とワークショップで交流した＝写真。

同学部ではこれまでも同小学校で、理科の学習を手助けする教材開発に協力してきた。担当の上平崇仁准教授は「フィジカルコンピューティングを応用して自主的に学びたくなるような教材をつくり、児童たちには自然科学への興味を抱いてもらいたい。大学生はユーザーと直接交流することで、対象ユーザーの理解度に合わせたコンテンツ制作の実習機会となる」と話す。

11月8日に行われた中間発表会には、同小学校の教諭2人も出席し、学生たちの作品にユーザーの視点から感想を伝えていた＝写真下。

今後は12月中旬に同小学校でワークショップを、2月中には登戸周辺で一般向け公開イベントを実施。3月に報告書を制作し、その後、配布可能なＰＤＦ化も予定している。

同じく担当の栗芝正臣准教授は「大人でも楽しめるものを開発するよう学生には指導している。一般に公開する機会を設けることで、多摩川を取り巻く地域住民の方々に、その魅力を再認識してもらう場になることも期待される」と話している。

高橋　義仁商学部准教授のゼミ

「企業・組織の経営戦略分析とビジネス・プランニング」経済産業省委託事業の起業家モデル講座に選定

経営戦略論とベンチャー企業論が研究領域の高橋義仁商学部准教授のゼミは、このほど経済産業省委託事業・平成22年度産業技術人材育成支援事業（起業家人材育成事業）の大学・大学院起業家教育推進ネットワーク起業家教育モデル講座に選定された。これは先駆的・特徴的で他大学への波及効果が期待できる起業家教育の講座をモデル講座として選定しているもので、本年度の指定は全国の大学・大学院から10講座。指定を受けた講座は、起業家教育の質的向上・量的拡大を目指す目的を担う。

「企業・組織の経営戦略分析とビジネス・プランニング」がテーマの同ゼミでは、2年次は企業経営戦略の基礎理論を学ぶためテキストを輪読。3年次には、ビジネス・プランニングの基礎と経営戦略のセオリーを学び、ビジネス・プランへの応用展開を図る。またコンテストなどへの応募を通じ、その評価を外部機関にも求める。4年次ではこれまでの学びを基礎に卒業論文をまとめる、といった一連のゼミ活動を行っている。

今回の選定を受けゼミ生たちは、3学年合同で「ベンチャーキャピタルの現状と展望」「世界から選ばれる日本ブランドの確立」といったテーマの講義を企業の第一線で活躍するスペシャリストから〝伝授〟してもらっている。

11月9日はアデコ㈱経営企画本部の山並裕尚さんが「事業開発、事業変革、経営の企画に必要とされる人材像」を講義。仕事に欠かせないキーワードや社会との接点を多くもつ経験をしながら将来・仕事について考え、学生時代に身につけておくべきことについて話した＝写真。

企画力高める実践的ビジネス教育を展開

高橋准教授は「ゼミの目標は、起業家を輩出するということよりも、企業で必要とされる『企画力』を高めること。体験に基づく実践的な講義を聴くことで、学生はビジネス・プランニングの基礎から実践へと意識が高まります。講座が大学の学びと社会のブリッジとなるような実践的ビジネス教育のモデルとなることを期待し、ゼミ生の意識の変化が楽しみです」と話している。

高橋准教授は、11月14日に東京・千代田区のグラントウキョウノースタワーで行われた全国フォーラム「次代を担うベンチャー精神を学生の心に」（主催：経済産業省、後援：文部科学省）でゼミの取り組みの効果を報告した。